

氏 名	かわ しま よう いち 川 島 洋 一
学位(専攻分野)	博 士 (学 術)
学 位 記 番 号	博 甲 第 133 号
学位授与の日付	平 成 9 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項
研 究 科・専 攻	工芸科学研究科 機能科学専攻
学 位 論 文 題 目	エリック・グンナー・アスプルンドの建築における「近代性」に関する基礎的研究
審 査 委 員	(主査) 教 授 日 向 進 教 授 河 邊 聡 教 授 西村征一郎

論文内容の要旨

本論文は、スウェーデンにおける近代建築の特質を考察することによって、近代建築という理念と形式が、その成立過程で有していた豊かな多様性と可能性を検証することを目的とするものである。そこで、スウェーデンの近代を代表する建築家の一人である、エリック・グンナー・アスプルンド(Erik Gunnar Asplund, 1885~1940)の「建築的思惟」(建築に関する思考と精神的活動の総体)と作品とを、近代建築の史的文脈において論及することが研究の課題として設定されている。

アスプルンドは自らの建築観や創作の主題と方法などに関してわずかな言説しか残していないため、その建築的思惟の内容を論じるにあたっては、彼を取り巻く建築的・文化的・社会的文脈を通観した上で、建築活動の事跡を整理し、作品の設計過程の意味を残された図面やスケッチを基に分析し、彼の言説と重ね合わせながら、その建築的思惟の内容を推測するという方法によっている。

具体的には、

1. スウェーデンにおける近代建築の成立過程とアスプルンドの建築活動との関係
 2. アスプルンドの創作活動における「生と死」の主題の展開と、作品「森の墓地」の設計意図の変遷との関係
 3. 作品「森の火葬場」における設計意図とアスプルンドの建築的思惟の内容
- という3つの論点を軸として、アスプルンドの建築理念と作品における「近代性」を解き明かすべく、考察が展開している。

□序論

研究の目的と意義、方法と資料、アスプルンドに関する既往研究を整理し、アスプルンド論の系譜とその問題の所在を明らかにしている。

□第1章 スウェーデンにおける世紀転換期の建築思潮とアスプルンド

スウェーデンにおける近代建築の成立過程の源泉を、19世紀末から20世紀初頭にかけて見られた「ナショナル・ロマンティシズム」と呼ばれる思潮に求め、その内容を検討している。「民族性」と「近代性」を志向したナショナル・ロマンティシズムは、建築に限らず広く芸術一般に見られた思潮であることから、芸術家と建築家の思潮との関連を考察し、ナショナル・ロマンティシズムの建築思潮がその後のスウェーデンの近代建築の成立過程に及ぼした影響と、アスプルンドの初期の活動との関係を論じている。

□第2章 スウェーデンにおける「近代建築」の成立とアスプルンド

スウェーデンにおける近代建築の成立過程と、アスプルンドの建築的行為の関係を検討し、「近代性」

の展開という観点からその建築活動について論じている。また、作品「森の教会」の設計過程を分析し、建築の原初の姿として古典建築または土着の伝統建築を発想の原点として参照し、その後の設計過程で独自の表現へと発展させる設計手法をとっていたことを指摘している。

□第3章 「森の墓地」の設計意図とアスプルンドの創作の主題

1915年以来、アスプルンドの生涯にわたって設計が続けられた「森の墓地」の設計過程を図面とスケッチから詳細に検討し、彼の意図が「森の教会」で提示された「死の不可避性」の主題をさらに発展させたものであることを明らかにしている。さらには、人間の「生と死」の意味そのものを問うことにあったことを第2章の考察の結果を基に示し、キリスト教に頼ることなく人間を「救済」することを意識していたことを明らかにするとともに、そこに「近代建築」の限界を超越する可能性が見られることを示している。

□第4章 アスプルンドの建築的思惟

アスプルンドの建築理念について総合的に検討し、彼が「近代建築」の教義を基本的に受け入れながら、単なる機能主義としてではなく、空間概念に日本建築から学んだ独自の解釈を加えて「建築空間の〈溶解〉」と理解していたことを示している。

□結論

以上の考察の結果をまとめ、整理している。

論文審査の結果の要旨

以上のように、本論文は建築家たちにとっての「近代性」の概念の変遷過程という視点から、スウェーデンに近代建築が導入される歴史的過程を整理し、北欧という地理的条件が建築を含む北欧の芸術全般に与えた固有性、ないしは近代化に与えた影響について考察したうえで、スウェーデンが近代建築を導入する際に主導的な役割をはたした建築家アスプルンドの建築的思惟と作品における内容と意味を論じたものである。また、アスプルンドの建築行為における「近代性」を考察し、近代建築が本質的に内包する問題点を彼がどのようにとらえ、どのような方法で克服することを試みたのかを論じている。

アスプルンドと彼の時代の建築理念における「近代性」の問題を、歴史的な視点から成立過程にまで遡ってその理念と形式の正統性について考究した本論文は、「近代」の意味を再検討する意義深い成果である。「近代建築」の表現形式には共通性が高いため世界的に共有されているととらえられているが、個々の国家や地域の社会形態や風土、文化状況などに応じて、理念の作動方法や社会的意味には微妙な差異があるとする視点は、「近代建築」批判を行う上で清新な意義が認められる。また、これまで十分な研究対象でなかった北欧における近代建築研究に光明をもたらすだけでなく、「近代建築」の主流をなす動向以外にも存在した数多くの試みの、北欧における事例研究としても評価することができる。

申請者は1989—1990年、1992—1993年、及び1995年にスウェーデン国立ルンド大学大学院においてもスウェーデン近代建築研究を行い、文献や図面等各種の資料調査・収集、建築調査や関係者のヒヤリングを積み重ねてきた。なお本論文の中心をなす論文のうち、2編が『デザイン理論』（意匠学会）および『日本建築学会計画系論文報告集』（日本建築学会）にそれぞれ審査を経て掲載、ないしは掲載が決定済み、また5編は『近畿支部研究報告 計画系』（同前）、『東海支部研究報告』（同前）で報告されており、それらの学術的価値は高い。

以上により、本論文は博士の学位授与申請に十分値するものと認められる。